



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学博物館における成人ASD（自閉スペクトラム症）当事者就労支援プログラムの開発と評価 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	沼崎, 麻子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15337号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/89572">https://hdl.handle.net/2115/89572</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	NUMASAKI_Mako_review.pdf, 審査の要旨



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：沼崎麻子

審査委員	主査	教授	安達 潤
	副査	教授	山本順司（九州大学）
	副査	准教授	齊藤真善（北海道教育大学札幌校）
	副査	教授	松田康子

## 学位論文題名

大学博物館における成人 ASD（自閉スペクトラム症）当事者就労支援プログラムの開発と評価

現在、発達障害者支援法や障害者権利条約によるインクルージョン推進により発達障害児者支援の必要性が高く認知されているが、現時の発達障害児者支援には「当事者視点の欠落」という根本問題があり「当事者に非当事者が支援を提供する」という当事者-非当事者の二項対立的な支援パラダイムの脱構築は進んでいない。社会とは当事者と非当事者を含む多様な人間で構成されており、インクルーシブに向かう支援には多様性の相互対等な共存という視点が求められる。

本研究が提示するのは、「社会的自立」という人としての普遍的課題を根底に据え、適応困難を抱えやすい ASD 当事者の視点による社会的自立への展望とその道筋が非当事者にとっても有用であること、当事者特性に調和しながら両者の協働的開発を支える方法論により両者が学び合える就労支援プログラムを理論的かつ実践的に開発したプロセスとその成果である。

本研究の構成は第一章から第四章のアセスメント編、第五章から第六章のプログラム開発・評価編、第七章の総合考察である。第一章では QOL を上げる支援として「社会的実用的コミュニケーション」が社会的自立・就労上の当事者・非当事者共通の課題であること、支援者のパターナリズム的理解が ASD 当事者を特定の職業から排除する問題に触れ、当事者・非当事者が相互に学び合う包括的支援による両者の不均衡是正の必要性から大学博物館における包括的支援構築の可能性を論じている。第二章では、職業と支援に対する当事者ニーズ調査から「必要に応じた支援内容の修正」「従業員全体の包括的支援」「当事者・非当事者の相互学び合い」がプログラムに反映すべき内容であることを示した。第三章では、当事者調査により博物館で展開される就労支援プログラムの妥当性を検証し、当事者は「学歴の高低に関係なく博物館を好む」一方、「過敏性による機械音等の苦手さ」等の環境調整の必要性を明示した。第四章では、プログラムの具体的検討を目的として北海道大学総合博物館の社会体験型科目の受講経験者と当事者を対象とした調査により、展示解説科目がプログラムへの応用可能性が最も高く、「当事者のコミュニケーション工夫の非当事者による学び」「対話スキルを学ぶ上での配慮事項の共有」「当事者の社会参加機会の拡大」「対話・伝達スキルの実践的学び」が可能となることを示した。第五章では、第四章までの知見に基づいて「知識・体験、シナリオ作成、ナレーション・所作、展示解説実践」の 4 部構成全 12 回のプログラム内容とテキスト及び指導書の概要を具体的に提示している。第六章では、当事者・非当事者と解説等経験の有無をカバーする 4 タイプの協力者を対象とする 3 つの調査でテキストの形成的評価を実施している。個別回答可能問題調査では当該課題への取り組みを調査し、汎用性の高い基本教材改善につなぎ、テキストモニター調査では 4 タイプ 2

グループが前半評価・後半評価を順に積み上げた結果、当事者・非当事者の協働において包括的支援と相互支援・学び合いの可能性が示された。ペア課題調査ではコロナ禍の影響から当事者と非当事者ペアがスピーチと質疑応答の実技、文章音読の相互評価等をオンラインで実施し、課題内容評価とアンケート及びインタビュー調査の結果から、経験あり当事者が本プログラムに適している一方、経験なし当事者への適用上の課題が示された。当事者・非当事者の学び合いでは、パートナーの回答を踏まえて学びを得たケースが把握されるとともに、非当事者が当事者から学びを得る事実が確認された。またテキスト評価から参加したペアは高評価を示しており、全12回の対面参加が本プログラムの実効性を向上させることが示唆されている。第七章の総合考察では、本プログラムに適さない当事者の存在、受講に際しての不安や自信喪失への予防策の必要性、当事者と非当事者の親和的関係を促す工夫等の課題が把握されたものの、本研究は当事者と非当事者による対等かつ協働的な支援構築が可能であることを証明し、実効的なプログラム構築における実践的課題や形成的評価の積み重ねの有用性が明示されている。

今後の課題としては、プログラムの対面実施による効果検証と博物館以外の場でのプログラムの応用可能性、プログラム開始時点での当事者・非当事者の相互理解の工夫、プログラムの実践的運用条件など、社会実装の具体化に向けた実証的研究であり、ここに期待したい。前述の課題はあるものの、本研究は、実証的研究に立脚した緻密な実践的プログラム開発による挑戦を通じて、当事者-非当事者という二項対立的支援パラダイムの脱構築に対する一定の成果を挙げた先駆的・意欲的な研究であり、現在のASD支援に一石を投じるものである。

以上により本審査委員会は、著者が北海道大学博士（教育学）を授与される資格があると判断する。

(1997字)